

本という建築

ロドルフ・テプフェールとジャン・ジロドウの場合

〈発表1〉 アルバムと本のあいだ — ロドルフ・テプフェールの「版画物語」の出版形態

スイスのジュネーヴ出身の作家・文筆家テプフェールは、現代的な意味でのストーリー漫画を事実上発明した人としても知られる。彼は小説・美術評論・旅行記から絵物語まで、ジャンルの境界を越える書き手であったが、「本」というメディアは彼の多面性を統合する接点でもあった。当初は市販のハードカバーのノートに仕上げ、回覧していた絵物語を「版画物語」として1833年に始めて出版するにあたり、転写石版という、ふつう複製版画にも本の印刷にも使わないシンプルな技法を選び、横長アルバムというフォーマットを採用した。この選択には、文章中心メディアとの差異化、読者の横方向への視線の意識など、さまざまな配慮があったと見られる。この「本」は、ペンによる手書きの文と絵の統一感をそのままに複製しているという意味で、全体が「版画」に近い印刷物であった。当時隆盛していた「絵入り雑誌」や「ロマン主義挿絵本」とは別の路線をめざしたテプフェールの発明は、この出版形態によく表れている。(東北大学 森田直子)

〈発表2〉 ジャン・ジロドウと挿絵本出版 — 本の「建築」が生んだ信頼関係

1928年、リヨン愛書家協会は、ジャン・ジロドウの小説『シュザンヌと太平洋』の壮麗な挿絵本をプロデュースさせた。この仕事を手掛けたのは、ジャン＝ガブリエル・ダラニェス。挿絵画家兼印刷業者であり、本の芸術家である。ダラニェスは、挿絵本制作者としての知と技の蓄積をいかに発揮し、ジロドウの小説を装飾と挿絵の付された「視覚芸術」へと昇華させた。テキストを、飾り文字等の装飾と挿絵、活字、レイアウト、紙の選択など、本の頁の構成要素すべてに目配りした「作品」へと仕上げたダラニェスの仕事の基盤は、彼のテキストの「読み手」としての力量にあった。今回は、この「作品」を分析することによって、ダラニェスの読み手としての特異性を明らかにし、この特異性が、1941年に出版された、ジロドウとダラニェスのもう一つの共同制作であるミステリアスな挿絵本『イメージとのたたかい』(ジロドウのテキストに、藤田嗣治作の絵がレイアウトされた作品)誕生に向けて、どのような道筋をつけたかを考えたい。(宮城学院大学 間瀬幸江)

2014年2月3日(月)16:00~19:00

文学研究科3階中会議室

どなたでも興味のある方の来聴を歓迎します(事前申し込み不要)

お問い合わせ:

情報科学研究科・森田(mona@m.tohoku.ac.jp) または文学研究科・森本(xkc-m2rt@m.tohoku.ac.jp)